

英文ライティング指導のための和文英訳

杉 浦 正 好

1. はじめに

日本の英語教育は変革期に差し掛かっている。2013年度から実施されている高等学校学習指導要領の「第8節 外国語：第3款 英語に関する各科目に共通する内容等」によれば、「英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするために、授業は英語で行うことを基本とする。」とされている。生徒の理解に応じて、説明を日本語で行うことも許容されるが、母語である日本語の使用は少なからず制限が加わっていると思われる。

新しい指導要領の導入に伴い、旧課程の主な科目は一新され、4技能を統合した指導を念頭に置いた「コミュニケーション英語」が新設された。さらに、「ライティング」や「オーラル・コミュニケーション」に代わり、主に「話すこと」と「書くこと」の2つの技能を扱う「英語表現」が加わった。

「英語表現」は英語で話したり書いたりする活動が中心であり、「授業は英語で行うことを基本とする」という学習指導要領の趣旨に従えば、日本語を利用した和文英訳という指導形態は高等学校の英語授業から排除されると思われた。ところが、2013年度から採用されている「英語表現Ⅰ」の多くの教科書を見ると、和文英訳が消え去るところか、練習問題として頻繁に利用されていることが判明した。「授業は英語で行うことを基本とする」という学習指導要領の趣旨とは異なるように思えるが、ライティング指導における和文英訳の重要性が再認識された形である。

日本の英語教育、特にライティング指導における和文英訳の役割については賛否が分かれるところである。最終目標は、日本語を介さずに英語で表現できることであるが、そこに至るまでの手段として和文英訳が有効な手段であるかどうかは1つの論点である。

本稿では、前半部分でライティング指導における和文英訳の役割について論じ、後半（第5節より）ではその実践例の1つとして、週刊英字新聞である『朝日ウイークリー』連載の「英文ライティング道場」を紹介したい。コンテキスト重視の和文英訳のあり方を試みたものである。

2. 英語教育と和文英訳・翻訳

和文英訳と翻訳は同一視されることがあり、翻訳を伴う英語学習形態については日本の英語教育界で次のような根強い批判がある。

翻訳 (translation) は基本的な言語技術ではないことに注意したい。それは特殊な訓練を必要とする高度な技能であることに注意しなければならない。特に日本語と英語のように語系を異にする言語の場合には、言語と構造と表現形式が非常に異なっているので、英語から日本語、または日本語から英語への直接的変換はほとんど不可能である。このことは、ふだんの英語の授業で生徒に訳をさせても、その生徒はしばしば内容を全く把握していないことで証明される。(土屋2011, p. 12)

指導技術の1つである和文英訳に対する批判と思われるが、中学校や高等学校の英語教育では翻

訳 (translation) と和文英訳 (Japanese-English translation) を必ずしも同じとは考えていない。英語指導の一環とする場合は、和文英訳であって、翻訳とは一線を画している。その発展形である翻訳は、専門教育であって、プロの領域を念頭に置いていると思われる。一般の学校教育では、翻訳技術まで指導するのは想定していない。

上記の批判は、生徒が内容を把握せずに訳す実態について述べられている。現実には確かにその通りであるが、それまでの不十分な指導にも責任の一端があるのではないだろうか。日本語から英語への「直接的変換」が困難であることを授業で理解させてこなかったことも一因であろう。

望月 (2010) は従来の英文ライティングあるいは英作文指導を「逐語訳」が主流であったと述べ、次のように断罪している。

従来の英作文は、1 文単位の日本語から英語への逐語訳主流であったが、その時代は終わりを告げ、これからは自らの発想による自己表現が主流になる。その目的に合った英作文の指導法を教師は求められている。(p. 156)

英作文が和文英訳になり、「直訳」が横行している現況を憂慮し、英語教育での利用を戒めたいと思われる。和文英訳は過去の指導形態とみなされ、学校現場ではふさわしくない指導活動であるとしている。

目指す方向としては正しいかもしれないが、「直訳」を戒めるような授業姿勢にすることも一案ではないだろうか。そのあるべき姿勢として山村 (1980) は、「日本語を英語の構造に、英語的な考え方にほぐしてから、その意味・内容を英語で書くことが重要です (p. iv)」と述べている。問題の本質は、「直訳」に頼らざるを得ない(一部の) 教員の英語力と指導技術にあるかもしれない。

3. 外国語教育における母語の利用

和文英訳に頼らないライティング指導は、「英語表現 I」の教科書の実例からみても現実的には困難であろう。しかも、母語不利用に関しては、

次のような理論的な問題点が挙げられている。

近年目覚ましい発達を遂げている認知言語学の知見を探ってみよう。House (2009, p. 63) は言語学習を認知過程とみなし、母語と外国語との関係を次のように述べている。

If language learning is regarded as a *cognitive process*, it naturally involves mental comparison between the formal and functional characteristics of native and foreign languages. This view is compatible with the already mentioned and long established precept in education: rely on what is already known as a stepping stone to new knowledge.

言語学習を認知過程の一部とすれば、母語と外国語の比較を伴うのは当然であり、新しい知識(外国語)を学ぶためには既知内容(母語)に頼る必要があるとしている。

さらに、外国語学習における母語の役割について、House (2009, p. 68) は次のように続けている。

Far from being an obstacle to learning a foreign language, the L1 is a useful resource on which learners can draw to ease their way to a more secure knowledge of and proficiency in the foreign language. The common educational tenet of linking new knowledge with which learners already know can be interpreted in the context of foreign language learning as involving a bilingualization process in which the L1 and translation play an active part.

上記の説明によれば、母語は外国語学習の障害になるどころか、上達を促す有益な手立てであるとしている。さらに、新しい知識と既存の知識を結びつけることは教育的理念の常識であり、それは母語と翻訳が果たす役割が大きい「二言語使用過程」を伴う外国語学習においても同様であるとしている。

母語を排除し、学習対象言語(外国語)のみで行う授業について、Cook (2010, p. 155) は著書の巻末で次のように述べている。

The purpose of this book has been twofold. One aim has been to show the weakness of exclusively monolingual language teaching—that the reasons behind it are more commercial and political than scientific, that it is supported only by selective evidence and shaky reasoning, and that it disregards learner and teacher needs. A second aim has been to show that translation has an important role to play in language learning—that it develops both language awareness and use, that it is pedagogically effective and educationally desirable, and that it answers student needs in the contemporary globalized and multicultural world.

学習対象の言語のみで行う授業は、科学的な根拠がないばかりか、商業主義や政治的な動機によるものであり、学習者や教員のニーズを無視しているとしている。さらに、翻訳により言語認識や言語使用は促され、教育効果があるとし、現在のグローバル化・多文化世界において、学習者のニーズに合っているとしている。

House (2009) と Cook (2010) は translation (翻訳) について述べており、その論理が必ずしも日本における和文英訳に当てはまるとは限らないが、両者とも言語教育における母語使用の重要性を唱えている。

一方、英語教育における和文英訳の効用を積極的に主張する研究もある。馬場 (2010, pp. 121–122) は多くの実証研究を挙げ、和文英訳はライティング能力を向上させる効果があり、指導方法によっては他の言語技能も伸びると指摘している。

以上をまとめると、和文英訳を上手に利用すれば、(1)母語の知識を活用することができるため、効率的である。(2)あいまいな理解を減ざることができる。(3)母語と外国語の違いを意識させることができ、異文化理解につながる。(4)指導方法によってはライティング能力、及びほかの言語技能を高める効果が期待できるのである。

4. 和文英訳の2つのアプローチ

英語のライティング活動を効果的に実施するた

めに、和文英訳は次の2つのアプローチに分類できる (杉浦2010)。

(1) 文法形式の学習手段

教室での和文英訳を、文法形式 (form) を学習させるための手段として位置づける。語彙や表現の乏しい初級学習者に、準備なしで英文を書かせるには困難が伴う。語彙も文法形式も不足しているのである。そのため、基礎的な英語表現力を養う活動として利用するのが和文英訳であり、英語学習の手立ての1つとして活用する。

(2) 意味内容の表現手段

日本語の意味 (meaning) を汲みとり、その内容を英語的な発想を介して英語で表現するものである。語彙や構文の単なる置き換えではなく、コンテキストを重視し、英語らしい英語を目指すものである。ある程度まとまった内容を表現することになり、主として中級以上の学習者が対象になる。「他人の意見をいかに正確に、適切に、無駄のない、しかも力強い英語で表現するかということも creativity の一部」(中尾1991, p. 72) である。他人の意見であっても、まとまった内容を自分なりに工夫して表現することも重要な学習である。

上記の2つのアプローチの関係を整理してみよう。一般的に言えば、学習段階に応じて、文法形式から意味表現へと進むことになろうが、その間には明確な境界線はなく、お互いにオーバーラップしている。あるいは、行きつ戻りつしながら進むことになろう。テーマを決めて、自分の考えを自由に書くようにするための準備段階として位置付けられる。

次のセクションから、和文英訳のライティング指導実践例を紹介したい。『朝日ウイークリー』紙連載の「英文ライティング道場」の内容に大幅に手を加えたものである。

5. 「英文ライティング道場」とは

『朝日ウイークリー』紙において、2007年10月から「英文ライティング道場」の執筆を始めた。毎月第2日曜日の発行紙に日本語の課題を出し、投稿された訳文を翌月の第2日曜日に講評と添削を掲載するのである。中級の英語学習者を想定し

ており、投稿者数は130人前後で推移している。すでに英語の基本を理解しており、その知識を活用してライティング力を伸ばし、さらに総合的な英語力に磨きをかけようとしている学習者が対象である。

(1) 編集方針と形態

自然な日本語を題材とするため、日本語の課題は『朝日新聞』、『週刊朝日』、『AERA』の記事から選んでいる。すべて朝日新聞社発行の出版物であるのは著作権に配慮するためである。原文は2～3行程度であるため、文脈があいまいな場合には改訂を加えている。

評価と講評に英語母語話者（オーストラリア人）の視点を大幅に取り入れているのが最大の特徴である。共同執筆者として Anthony G. Ryan 氏（愛知教育大学准教授）に依頼し、両者の共通関心分野である discourse analysis（談話分析）を理論的背景とした内容にしている。

(2) 原文と訳文との差異

自然な日本語を自然な英語で表現することを念頭においているため、日本語の原文と産出された英文との違いが生じることがある。その違いをどの程度まで容認するかは、立場によって議論の分かれるところである。その立場の両端に位置するのは、プロの翻訳家と英語教育者である。

プロの翻訳者である Heath (2013 p. 12) は次のように述べ、この問題について一石を投じている。

Although I know translation is mostly a hobby among the members of this group, you should know that it's considered very poor form to add extraneous information to your translation—especially when the translator is paid by the English word!

和文英訳を通じて英語のライティング能力を向上しようとする同好会グループに向けてのコメントである。プロの翻訳者からみると、原文にない情報を補足することは禁じ手ということになる。翻訳の支払いは、産出された英語の語数によって決まるのであり、余分な語を加えるのは「水増し請求」ということになる。

上記の立場はプロの翻訳家の立場に由来するものと思われる。日本語から英語への翻訳は企業からの依頼が圧倒的に多く、そのほとんどは科学技術分野である。諸外国に発信を必要とする科学技術分野では原文と訳文との差が少ない。原文そのものにも厳密さと緻密さが求められる分野であることから十分に理解できよう。

一方、エッセイを始めとする文学作品など、科学技術分野から遠いジャンルでは曖昧さがつきまとう。日本語から英語にそのまま一字一句を置き換えるのではなく、状況や文脈を考慮して英訳することが求められる。英文として理解されるためには、日英語の文脈（コンテキスト）上のギャップを埋め、原文にない内容も付加する必要もある。discourse analysis（談話分析）が果たす役割が大きな領域や分野であり、「英文ライティング道場」の扱うトピックのほとんどはこの領域や分野に属している。

6. 「英文ライティング道場」での実践例

本稿で扱われている内容は、『朝日ウイークリー』紙第57回（2011年6月号）から第71回（2012年9月号）に連載された15回分の内容を加筆修正したものである。なお、2012月1月号は『朝日ウイークリー』紙の2000号記念号となり、「英文エッセーコンテスト」が特集として組まれたため、「英文ライティング道場」は休載されている。

各項目の見出しの日本語は、下欄の枠組み内にある課題文からの抜粋である。問題点を浮き彫りにするために変更を加えたものもある。英文の添削例は読者からの投稿を参考に、同様の理由で部分的に編集してある。

(1) 東日本大震災 (the Great East Japan Earthquake)

では、海外から次々に支援の手が差し伸べられた。

In the Great East Japan Earthquake, helping hands were continuously extended from abroad.

⇒ After the Great East Japan Earthquake, helping hands from abroad were extended one after another.

「東日本大震災では」を in the Great East Japan Earthquake とした作品が散見された。文法上は問

題ないが、背景的知識が不足している。内容を時系列で判断すれば、海外からの支援は震災後であったので after the Great East Japan Earthquake とする。after の代わりに following や in the wake of も英字新聞では多用されている。

「次々に」は one after another 「次から次へ」が内容的に適切である。長い語句であるので、位置は最後に置くと座りがよい。副詞の continuously は「絶え間なく」の意味であり、extended と一緒に使用すると、「(援助の) 手がどんどん伸びていった」という化け物を彷彿させるニュアンスになってしまう。

Helping hands were extended from abroad (to ...) とすると、「支援をした人々は外国に滞在し、そこから支援の手を差し伸びた」の意味にもなる。Helping hands from abroad were extended (to ...) とすれば誤解は避けられる。

【第57回課題】

東日本大震災 (the Great East Japan Earthquake) では、海外から次々に支援の手が差し伸べられた。20近い国から約1000人の救援隊が入った。生存者救出はならなかったが、彼らの貢献は大きかった。(朝日新聞グローブ2011.4.3 一部改訂)

(2) 社長のコネで入社した30代の男性の上司がろくに仕事をしていません。

The man in his thirties, who entered our company through the personal contact with the president, hasn't worked seriously.

⇒ My boss, a man in his thirties who entered our company through personal connections with the president, doesn't do his job seriously.

「上司」が訳し漏れているので、My boss を文頭に置く。その後に「30代の男性」を付け加える。

「30代の男性」は冠詞がポイントである。the man in his thirties とすると、「唯一の30代の男性」の意味になり、その会社には30代の男性は他にいないことを示唆する。a man in his thirties であれば、「30代の男性はほかにもいるが、その内の1人」の意味であるので内容として無難である。

「コネ」は connection が語源であるが、一般的に connections や contacts のように複数形にする。ちなみに、the personal contact ではあいまいになり、「1回のみのお会合」による「個人的な1回の接触」を意味する。

work seriously でも誤りではないが、take his job seriously あるいは do his job seriously のほうが一般的である。副詞は seriously のほかに、diligently や earnestly でもよい。

【第58回課題】

社長のコネで入社した30代の男性の上司がろくに仕事をしていません。サボっているくせに、そうでないようにみせかけようとする態度にむかつきます。(朝日新聞2011.4.30)

(3) 自分の都合に合わせて日程が選べるし、旅先でもだれに気を使うこともない。

I can plan a trip schedule at your own choice, and I don't have to care about anyone on a trip.

⇒ I can plan an itinerary to suit myself, and I don't have to care about the wishes of another traveling companion on a trip.

「日程は」は「旅程」のことであり、a trip schedule でも意味は通じるが、自然な英語とはいえない。飛行機や旅行などの具体的な「旅程」は an itinerary である。

at one's own choice は「好き勝手に」の意味合いがある。「自分の都合に合わせて」は to suit oneself の言い回しが最適である。

この場合の「旅先でもだれに」は「ほかの旅の同行者」と思われるので、another traveling companion が最適である。anyone や others では「旅先で出会う人々」も含まれてしまう。

【第59回課題】

東京都在住の女性は声を弾ませて、「自分の都合に合わせて日程が選べるし、旅先でもだれに気を使うこともない。一人旅がこんなに楽しいとは思いませんでした」と述べた。

(朝日新聞 2011.6.10)

(4) 水の事故から子どもたちを守るための対策が必要です。

Drastic measures to protect children from water accidents are indispensable.

⇒ Drastic measures to protect children from water-related accidents are needed.

「水の事故」を water accidents とするのは一般的ではない。「水死」の場合は drowning であるが、この場合は水に関係するすべての事故について言及していると思われるので、water-related accidents 「水に関係する事故」が最もふさわしい。

indispensable の定義は、“someone or something that is indispensable is so important or useful that it is impossible to manage without them” (*Longman Dictionary of Contemporary English*) であり、「すであるもので、欠けていると困る物や人」について言う。対策はこれから取れば問題ないので、needed とする。

【第60回課題】

暑い日はやっぱり海や川での水遊び。でも、子供が亡くなった水難事故の半数が夏休みに起きています。水の事故から子どもたちを守るための対策が必要です。

(朝日新聞2011.7.23 一部改訂)

(5) 野菜の生産に向く高原が少ないうえにマニラ首都圏などの大消費地から遠く、流通を支えるインフラも不十分だからだ。

There are few highlands (that are) appropriate for producing them. Furthermore, the lands are far from the major consuming markets such as the Manila metropolitan area and infrastructures to back up distribution are inadequate.

⇒ There are few highlands (that are) appropriate for producing them. Furthermore, the farms are far from the major consuming markets such as the Manila metropolitan area, and infrastructure to back up distribution is inadequate.

「生産地」を lands としたが、意味が広過ぎて、あいまいである。regions や areas でもよいが、

farms とすると具体的で分かりやすい。

この文脈での「インフラ」は、野菜の輸送システムについて述べており、全体として1つであるので単数形がふさわしい。続く動詞も単数形に合わせる。

【第61回課題】

フィリピンでは野菜が高価だ。野菜の生産に向く高原が少ないうえにマニラ首都圏などの大消費地から遠く、流通を支えるインフラも不十分だからだ。(朝日新聞2011.8.1)

(6) (彼は) パソコンなどを駆使する、今風の男のはずだ。

He must be an up-to-date man who makes full use of latest gadgets like personal computer, and so on.

⇒ He would be an up-to-date man who makes full use of the latest gadgets like personal computers, and the like.

must ... に「…はずだ」の意味はない。下欄の原文が示すように、「彼は」はシャーロック・ホームズを指しており、現存していないので仮定法過去で表現する。should は「提案」になってしまうので、would ... 「…であろう」がふさわしい。

原文にはないが、latest 「最新の」は最上級なので the が必要である。

gadgets 「機器」が複数形になっているので、その1例である computers も複数形にする。ちなみに、computer の略語は PC で問題はないが、その複数形は PC's や PCs となる。

「など」を and so on とするのは誤りではないが、話し言葉である。and the like にするか、and other state-of-the-art devices や and other digital devices のように具体的に補足するのがよい。

【第62回課題】

もし今、シャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes) が生きていたら、ハンチング帽をかぶり、パイプをくわえているだろうか。ノーだ。パソコンなどを駆使する、今風の男のはずだ。(朝日新聞2013.9.2 一部省略)

(7) 沖で漁船から転落して行方不明になっていた漁師の男性が1週間ぶりに生還した。

A fisherman returned safe one week after he fell overboard and became missing at sea.

⇒A fisherman returned safely one week after he fell overboard and went missing at sea.

safe は形容詞であるので、returned を修飾する場合は safely (副詞) にする。She arrived safe. という言い方もあるが、この場合の safe は「安全な状態で」の意味を表す形容詞の叙述用法である。She arrived back safe and sound. のように、「無事息災に」という決まり文句もあるが叙述用法としては少ない。

became missing 「行方不明にされた」とすると、メディアは(海での)行方不明者として扱っていたことになるので、誤解を避けるために went missing とするほうがよい。

【第63回課題】

沖で漁船から転落して行方不明になっていた漁師の男性が1週間ぶりに生還した。流木につかまって海岸にたどり着いた後、わき水を飲みながら野宿を重ねたという。

(朝日新聞2011.10.10一部省略)

(8) 移民に交じって、ウォール街の元トレーダーや求職中の若者もハンドルを握る。

Ex-traders on Wall Street and young job seekers are found on the wheel among immigrants.

⇒Ex-traders from Wall Street and young job seekers can be found behind the wheel together with immigrants.

He is on Wall Street. とすると「彼はウォール街に現在いる、あるいは住んでいる」ことになってしまう。この文脈では「出身」や「前歴」を表すので前置詞は from にする。

are found でも誤りではないが、読者に驚きの気持ちを伝えるためには、can be found 「見ることが可能である」としたほうがよい。

車の運転について述べるならば、on the wheel より behind the wheel や at the wheel が慣用的である。

among immigrants とすると、「移民の1人に」の意味になり、元トレーダーも「移民」になってしまうので、together with にする。ほかに、as well as や other than や besides や in addition to も可能である。

【第64回課題】

ニューヨークのタクシー業界に、異変が起きている。多数を占める移民に交じって、ウォール街の元トレーダーや求職中の若者もハンドルを握る。(朝日新聞2011.12.23 一部省略)

(9) 写真フィルムの草分け企業が衰退する一方、日本のライバルは業態転換で生き延びている。

While the pioneer enterprise in the photographic film business dropped, its competing companies in Japan have been managing to survive by branching out into new fields in industry.

⇒While the pioneer enterprise in the photographic film business (has) failed, its rival companies in Japan (have) managed to survive by branching out into new fields within the industry.

会社が「衰退する」は failed や collapsed ならば問題ないが、dropped は「会社」の連語関係として適切でない。時制はニュアンスによっては完了形、過去形、進行形が可能である。「衰退しつつある」というニュアンスを伝えたいならば、has been ailing for years や fell into (a) decline と表現するとよい。なお、is declining や has been declining のように、decline を動詞として使うと、「断る」の意味にも解釈されるので避けたい。

「ライバル(の)」は現在分詞の competing でもよいが、rival のほうが文脈に合致している。

原文では時制がはっきりしないが、failed であれば managed に、has failed であれば have managed と時制を一致させる。

in industry 「業界で」とすると、すべての業種を意味することになる。富士フィルムなどは、現在でもフィルム業界内で事業を展開しているので within the industry とする。

なお、「業態転換で」は by getting into different

types of business 「異なる業種に参入することで」が簡潔明瞭である。ほかに, by transforming their businesses, by breaking away from their traditional business lines, by seeking opportunities in other fields of business などと表現できる。

【第65回課題】

イーストマン・コダック (Eastman Kodak Co.) が, 経営破綻に追い込まれた。写真フィルムの草分け企業が衰退する一方, 日本のライバルは業態転換で生き延びている。

(朝日新聞2012.1.20 一部改訂)

(10) 英国を構成する4地域の一つスコットランドが独立を問う住民投票の実施を決めた。

Scotland, which forms one of the four regions in the U.K., decided to hold a referendum on its independence.
⇒Scotland, one of the four countries comprising the U.K., decided to hold a referendum on its independence.

英国に関する背景知識が必要である。「英国」の正式名は the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland である。Great Britain は大ブリテン島のことで, Scotland, England, Wales があり, アイルランド島北東部を占める Northern Ireland とともに連合王国を構成している。この場合の「地域」は, 歴史的な経緯もあって, それぞれ country と一般的に呼ばれている。region や part などでも意味は通るが, この場合は country あるは nation が最適である。

英国が Scotland を含む4つの countries で構成されているというのはよいが, Scotland がその1つを「(新たに) 形成する」というのは本末転倒である。Scotland には連合王国に対する積極的な姿勢は必ずしも見られないからである。

【第66回課題】

英国を構成する4地域の一つスコットランドが独立を問う住民投票の実施を決めた。波紋は, かつて紛争に揺れた北アイルランドから海外まで広がる。

(朝日新聞2012.2.16)

(11) プロ野球セリーグが今季から予告先発を導入することになった。

Starting in this regular season, the Central League of Japanese professional baseball has decided to announce the names of the starting pitchers beforehand.
⇒Starting this regular season, the Central League of Japanese professional baseball has decided to announce the names of the starting pitchers before games.

「予告先発」の制度は「今季」の開始前に導入される。in this regular season とすれば「今季レギュラーシーズンの途中に」の意味になるので文脈上では不適切である。starting this year 「今年から」あるいは starting this April 「今年の4月から」のように, starting this regular season 「今季レギュラーシーズン(の始め)から」とすれば誤解は避けられる。

beforehand でも誤りではないが, 何の前であるか具体性に欠ける。「予告先発」は正式には1日前に行われることになっているが, プロ野球ファンには試合前という認識がある。試合前の期間は明示されないが, 一般的には before games でも十分であろう。

(12) 人気投手らの登板を知らせるファンサービスで, 観客動員増につなげたい考えだ。

In an effort to win the hearts and minds of baseball fans, the organization lets them know the dates when the ace hurlers take the mound and hopes that more people thereby go to the ballparks.

⇒In an effort to win the hearts and minds of baseball fans, the organization lets fans know the dates when the ace hurlers are to take the mound in hope that more people thereby go to the ballparks.

登板日はこれからであるので, 未来表現である will take や are (going) to take にする。

「ファンサービスで」を In an effort to win the hearts and minds of baseball fans というように具体化して説明している。その強力な理由に比べると, 接続詞の and では文体として軽くなってしまふ。because it hopes that や in (the) hope that と続けるとバランス的な違和感が解消される。

【第67回課題】

プロ野球セリーグが今季から予告先発を導入することになった。人気投手らの登板を知らせるファンサービスで、観客動員増につなげたい考えだ。(朝日新聞2012.3.9)

- (13) 価格が高い車を買える消費者が増え、大きめの車が売れ出している。

The consumers being able to buy more expensive cars have increased, and bigger cars begin to be sold.

⇒The number of consumers able to buy more expensive cars has increased, and larger cars are beginning to sell well.

増えたのは消費者の数であるので、numberが必要である。動詞も number に合わせて has increased とする。

consumers who are able to ... から consumers being able to ... へと分詞構文で表現したものと思われる。折角なので、being も省略する。

big は口語的で、「感覚的に大きい」という気持ちを示す感情的な語である。large は「客観的に大きい」という意味である。

「大きめの車」は以前から売られているので、beginning to sell well 「売れ行きがよくなり始めている」とすれば論理的である。

【第68回課題】

小型車が大半だったインドの自動車市場が変わり始めた。価格が高い車を買える消費者が増え、大きめの車が売れ出している。(朝日新聞2012.4.14)

- (14) 自家用車がないので、ストがある度にうんざりだ。

As I don't own my private car, I feel weary every time on a strike.

⇒As I don't own a car, I get weary every time transport workers go on (a) strike.

「私は自家用車がある」は I have a car. で十分である。I don't have my car とすると、私用の車は

ないが、他人の車を所有していることになる。同様に、I don't have my private car とすると、公用車ならば持っていることを示唆する。

feel weary は「うんざりした気分である」の意味になる。実際は、ストが原因で歩く羽目になるので、get weary 「うんざりする」、あるいは get sick and tired や get fed up にする。

every time や each time の後には節「主語＋(述語)動詞」が必要である。このままだと ... every time I am on a strike. で I am が省略されていると理解され、ストは私がしていることになる。

【第69回課題】

人口約110万人のブリュッセルで4月、バスや路面電車など公共交通機関のストが1週間近く続いた。自家用車がないので、ストがある度にうんざりだ。(朝日新聞2012.5.8)

- (15) 初めて食べたのは裕福な同級生のお宅にお邪魔したときで、こんなにうまい果物があるんだと思った。

My first experience to eat one was when I visited my wealthy classmate's home, and I realized that such a delicious fruit exists.

⇒My first experience of eating one was when I visited the home of a classmate from a wealthy family. For the first time I realized that such a delicious fruit existed.

My first experience に続くのは、of ...ing 形であり、to ... ではない。

my wealthy classmate でもよいが、厳密に言えば、同級生が裕福というよりは、その両親の同級生は a classmate from a wealthy family が正確である。

and は出来事を羅列するだけに用いる接続詞であり、意味的に弱い。この課題文のように、驚きの事実を述べる場合には、独立した文にしたほうがよい。for the first time のように、時間を明示し、先頭に置くことでインパクトが強くなる。

「うまい果物がある」は「歴史的現在」ではなく、過去の出来事であるので、realized に時制を

合わせて existed と過去形にする。

【第70回課題】

子どもの頃、メロンは超高級品。初めて食べたのは裕福な同級生のお宅にお邪魔したときで、こんなにうまい果物があるんだと思った。

(朝日新聞2012.6.23 改訂)

(16) 日本に留学しようと思ったのは、資源もないのになぜ経済大国になれたか知りたかったから。

The reason why I decided to go to Japan for study was that I wanted to know the secret of her rise to an economic power in spite of her lack of natural resources.

⇒ The reason why I decided to come to Japan to study was that I wanted to know the secret of her rise to economic power in spite of her lack of natural resources.

話者がどこにいるかで動詞が左右される。日本にいれば、動詞は come になる。母国のベナンにいれば go になる。駐日大使である話者は日本にいてと推測されるので、come にする。

for study は「研究のため」の意味が強いので、この場合は名詞よりは動詞として study を使ったほうがよい。

power は加算名詞にも不可算名詞にもなる。her rise to ... 「…の状態に上り詰める」の後は抽象名詞になり、不可算名詞の扱いである。ちなみに、可算名詞の場合は、「大国」や「強国」の意味になる。

【第71回課題】

日本に留学しようと思ったのは、資源もないのになぜ経済大国になれたか知りたかったから。でも日本はあまりにも遠い国で、学校では日本人はちょんまげをして刀を身につけている怖い人たちだと教えられていた。

(駐日ベナン大使ゾマホン・ルフィン氏談、朝日新聞2012.7.10)

7. おわりに

『朝日ウイークリー』紙上では、日本語から英語への語句の置き換えを避け、文脈を重視した英訳を試みている。換言すれば、自然な日本語を、自然な英語で表現することを念頭に実践してきたつもりである。材料として選んだ新聞記事は、学習者本人の現実場面とは異なるかもしれないが、英文構成を考えるための文脈を提供するものである。

和文英訳というと、翻訳ソフトと同じように、日本語をそのまま英語に置き換える活動と誤解されることがある。その誤解が正しければ、正解の英文は1つしかないことになる。「英文ライティング道場」では、参考試訳を載せるものの、究極の正解はない。英語らしい英語を模索する過程が重要であり、「他の人が書いたものが載っているので、新たな切り口から英文を見ることができません」という読者からの感想にもあるように、多様な産出を容認することにしている。和文英訳の過程では、英語らしい英語を求めて試行錯誤が続き、その過程を通して、英文ライティングの技法のみならず、日英の発想と文構造の違いを理解することを旨としている。

和文英訳は英文ライティング指導のための王道ではない。逐語訳に頼らず、自由英作文への移行活動とし、コミュニケーション能力の素地を培う手段の1つとして和文英訳を位置づけられれば幸いである。

引用文献

- 杉浦正好 (2010) 「ライティング指導としての和文英訳」『愛知学院大学文学部紀要』第39号：愛知学院大学文学部
- 土屋澄男(編) (2011) 『新編英語科教育法入門』東京：研究社
- 中尾清秋 (1991) 『英文表現の基本と実際』東京：研究社
- 馬場千秋 (2010) 「ライティング指導でもとめられているもの」大学英語教育学会監修、木村博是・木村友保・氏木道人編著『リーディングとライティングの理論と実践—英語を主体的に「読む」・「書く」』（英語教育学体系 第10巻）東京：大修館書店、

英文ライティング指導のための和文英訳 (杉浦)

- pp. 121-122
- 望月昭彦(編) (2010) 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』 東京：大修館書店
- 山村三郎 (1980) 『英語表現の実際 役に立つ表現集 150』 東京：研究社
- Cook, G. (2010) *Translation in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Heath, N. S. (2013) 『英作文研究』 第96号, 湖南市 (滋賀県)：英作文研究会
- House, J. (2009) *Translation*. Oxford: Oxford University Press.